Tsuyoshi Moriyama
Takayuki Matsuyama
Naomi Watanabe
Tetsuya Tanokura
Daitetsu Miura
Hitoshi Yajima
Takayuki Hosonuma

カラボギャラリー第8回企画展

陰翳の中の色彩美

―日本の伝統―

col.lab gallery
International Research Center
for Color Science and Art
Tokyo Polytechnic University

文化庁
大学から文化力 POWER OF CULTURE
令和3年度 文化庁 大学における文化芸術推進事業

CONTENTS

ごあいさつ ―― P3
能舞台と能装束 ―― P6・7
紅浅葱段替り露芝に梅水仙の雪輪と垣に菊文様唐織 ―― P8
朱生成段替り花籠に藤萩文様唐織 ―― P9
笹色の紅 ―― P10・11
陰翳礼讃 ―― P12・13
床の間 ―― P14・15
和の色の広がり ―― P16・17
記念ワークショップ ―― P18
奥付 ―― P19

ごあいさつ

東京工芸大学の原点は、1923年（大正12年）に創設された、我が国で最初の写真専門の高等教育機関「小西写真専門学校」です。当時最先端メディアであった写真の技術者・研究者を養成するために創設され、写真技術（テクノロジー）と写真表現（アート）との融合を目指す極めて先駆的な学校でした。現在の本学は、工学部と芸術学部という二つの学部を擁するユニークな構成の総合大学へと発展していますが、それは「工・芸融合」という創設以来継承される本学の精神を体現しているのです。

2016年度（平成28年度）に私立大学研究ブランディング事業に採択されたことを契機として、色の国際科学芸術研究センターが設立されました。本センターは、本学のルーツである写真、印刷、光学といった学問分野に根差し、今日の工学部と芸術学部の二つの学部に共通する全学的な研究テーマとして「色」を取り上げた、国内の大学で唯一の「色」の国際的な研究拠点です。

col.labギャラリー（カラボギャラリー）は、「色」について楽しく学ぶことができる公開施設であり、「色」の研究成果を、写真、映像、拡張現実、プロジェクションマッピング、CG等の最新のメディアアートの手法によって情報発信する、「工・芸融合」を推進する本学ならではの取り組みと言えるでしょう。

色の国際科学芸術研究センターの活動を通して、未来を創造する科学と芸術の発展に資することを目指してまいりますので、これからの本学の取り組みにどうぞご期待ください。

学長　**吉野 弘章**

我々の知る世界、それは所詮、我々の目や耳を通して認識しているものであるから、我々の目が曇れば世界も曇るとは、ウパニシャッド哲学の梵我一如という言葉の教えるところです。これは、目に見える色は見る者の内面であり、見る者の内面が色として見えるという色即是空空即是色の思想に通じます。我々の視覚が、注目した前方のごく限られた範囲から飛来する高々波長380～750nmの光を捉えているに過ぎないことを考えれば、目に見える世界がいかに限られているかは自明ですが、古来の哲学はさらに踏み込んで、我々の心の中までをも見通して「見える」を定義しています。そして、その哲学はシルクロードの終着点である日本列島へ到来しました。沈み込む太平洋プレートのエネルギーで火山噴火や地震を繰り返し台風の風雨や豪雪にさらされる厳しい土地を、温帯の豊かな植物が包み込んで四季を彩るこの列島で、日本人は、八百万神に己の業の数々を映しながら日本伝統の色遣いを含む独自の文化を育んできました。我々は、外光を滅した家屋の陰翳の中で鋭く細やかに研ぎ澄まされた色彩感覚をもって、四季折々を彩る植物の装いから命名した色の数々を愛でてきたのです。皆さまが、陰翳の中ではじめて輝きを放つ色彩美を伝える日本の伝統文化に接し、世の喧騒に埋もれた地味でありふれた日常（陰翳）の中にあってもみずからの存在を認め、確かに明るく生きる術を見定めるきっかけとなることを祈って企画致しました。

本展ディレクター　工学部工学科准教授　**森山 剛**

col lab
gallery
カラボギャラリー

カラボのVI（ビジュアル・アイデンティティ）

私立大学研究ブランディング事業における色の国際科学芸術研究センター及びギャラリーのロゴタイプとアイコンマークを制作した。ネーミングはCOLORとLABORATORYを合体した「col.lab」カラボと読む。本事業では、工学部と芸術学部の連携、海外の大学との連携、地域との連携等もめざしているので、「col.lab」には‘collaboration’の意味も込めている。中央の黒丸を光の三原色であるRGB(レッド、グリーン、ブルー)をイメージし、あえて東京工芸大学のVIカラーの青色と黄色に差し替えてRYB（レッド、イエロー、ブルー）でアイコン化している。

人間の５感のうち視覚は最大の感覚。脳の約６～８割が視覚に情報を支配されている。視覚における色の感じ方は人それぞれ、目と脳の相関関係によって異なり、複数の人間が同じ色感覚を共有しているわけではない。色は不思議で魅力的な存在である。

グラフィックデザイナー　**廣村 正彰**

復元能装束「紅浅葱段替り露芝に梅水仙の雪輪と垣に菊文様唐織」　原本：観世流 片山九郎右衛門家 蔵　復元：渡文 株式会社　所蔵：公益財団法人 手織技術振興財団

能舞台と能装束

渡辺 尚美（渡文株式会社）、**松山 隆之**（能楽シテ方観世流）、**田野倉 徹也**（数寄屋建築家）、**細沼 孝之**（映像作家）

西陣織・唐織について

古墳時代に伝わった絹織物と養蚕から歴史上の荒波を何度も乗り越えながら独自の発展を遂げ、日本独自の高度な絹織物の技術を発展させた西陣織において、最も高度な技術を結集したものの一つが唐織である。唐織は、経（たて）糸に地の緯（よこ）糸を通すと共に、刺繍のように浮き上がらせた文様（浮文）を織る。文様は絵緯糸（えぬきいと）を挟み込むように通さねばならず、そこでこの経糸と緯糸の関係を２次元の座標系と見ることで、緯糸が経糸の後ろを通るか前を通るかを２進符号で表現することができ、これをコンピュータ制御するジャカード織機が用いられる（写真は紋意匠図と織り上がりの比較）。

こうして表面が立体構造を持つ唐織は、能装束として着用される際に、様々な方向から当たる光を反射して七変化する風合いを有する。特に金箔を貼り付けた引箔（ひきはく）や金糸などの光沢糸が用いられた箇所は、古来屋外に能舞台があった当時に突き出た軒端に遮られる弱い光をも鏡面反射し、その色合いを変化させながらリフレクターとしての役割も担った。

神男女狂鬼の五番立（五つの演目を一日かけて上演していく正式な上演形式）では、シテ（主役）の性質に応じた衣装が選択され、特に太陽高度の最も高い時間帯に上演される鬘（かずら）物では、女性のシテが唐織をまとい衣装が最も美しく映えるよう配慮されている。また衣装の文様は、お正月にはおめでたい松喰鶴（まつくいづる）をあしらうなど季節に配慮したり、演目に関連する文学作品をモチーフにしたりして選ばれる。

協力：【ナレーション】中村啓子
【MA】根本正道（株式会社クレッシェンド）

裂地（ショーケース内）について

縞と浅葱を絣で染め分けた段替りに、桐と蒲公英の文様を配した唐織。

原本は、浅葱の色が淡い水色だが、現代の能舞台照明を鑑み、深みを持たせた色で作られている。また、浅葱部分は、経糸（たていと）と緯糸（よこいと）の色を変えて織ることで、着る人の体の膨らみや動きに合わせて色が変化するような視覚効果を持たせている。「織り色」とも呼ばれる技法で、見学者が様々な方向から角度を変えて観ることで、織り上げられた２色の糸が作り出す変化を感じることができる。

縞浅葱段替桐蒲公英唐織 能装束裂地
原本：観世流 片山九郎右衛門家 蔵
復元創作：渡文 株式会社

（文・森山剛）

復元能装束
「紅浅葱段替り露芝に梅水仙の雪輪と垣に菊文様唐織」

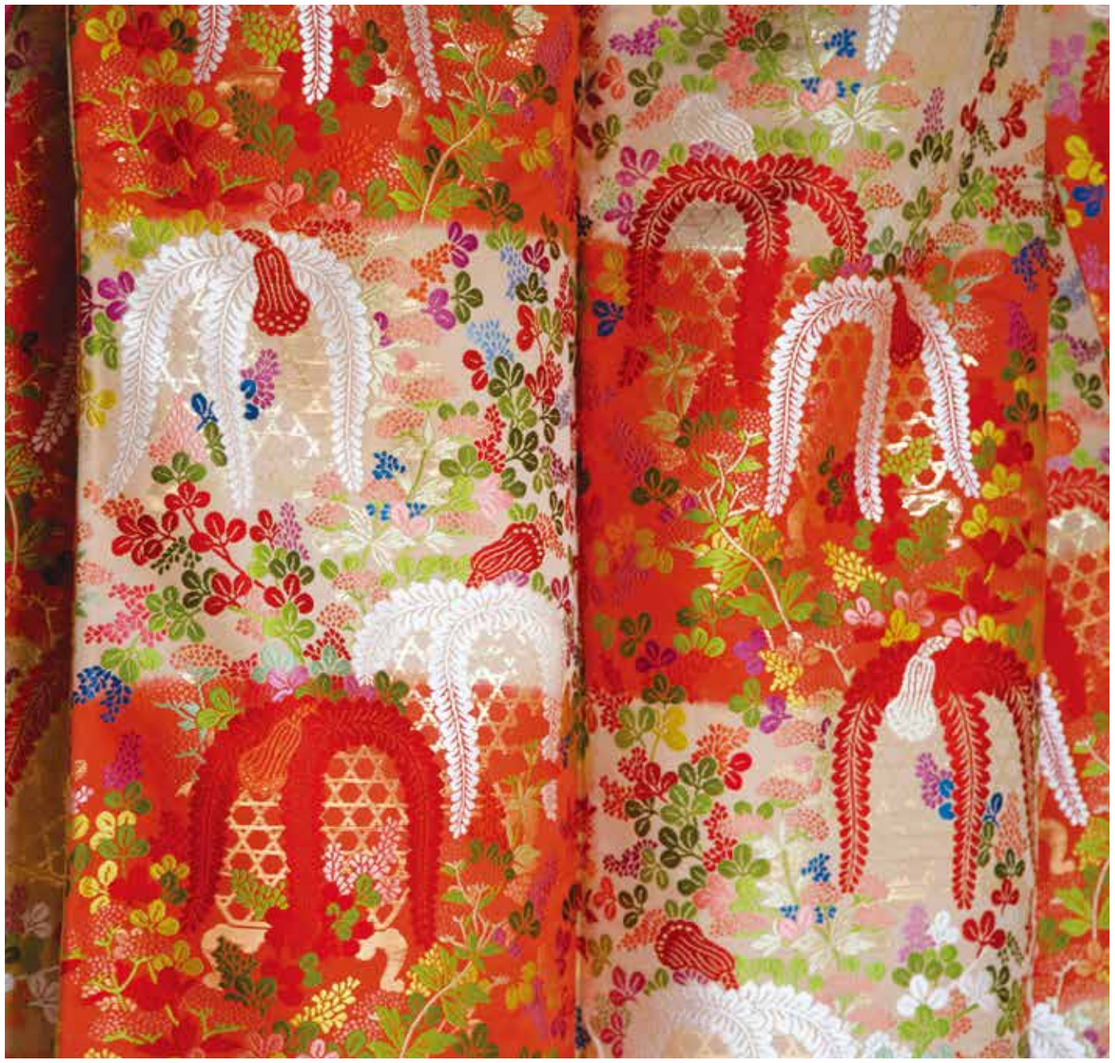
露芝地に梅と水仙をおさめた雪輪を配し、凛とした早春の趣をあらわし、垣に菊花で秋の風情を見せ、春秋を一領で示す文様である。この二種の組合せが各段におさまるように配されている。浅葱と紅段が替わる部分の色の経糸染分(たていとそめわ)けに、それぞれにじみ入った二色が両段におよび、偶然にできた軽い暈(ぼか)しのような効果が注目される。この一領の配色に限ったことではないが、これほどの多色ながら、煩雑にならない配色の秘密は、「白」色の処理がきわめて配慮されていることによるものであろう。

原本:観世流 片山九郎右衛門家 蔵
復元:渡文 株式会社
所蔵:公益財団法人 手織技術振興財団

「朱生成(しゅきなり)段替り花籠に藤萩文様唐織」

金糸で織られた硬質な印象の花籠に、刺繍のように浮き上がらせた文様(浮文)で藤と萩を柔らかに配し、陰翳を生み出している。全体に配される春の藤と秋の萩。いわゆる春秋文様をあしらった一領だが、桜に比べ藤は晩春を指すことから秋への印象が深まる。淡い朱色と濁した生成り色がそれぞれ滲み入るように段に組まれ、偶然にできた軽い暈(ぼか)しのような効果が生まれることや、段を跨いだ文様の重ね方などが奥行きを感じさせている。また、地色に生成り色を施し、白藤を効果的に浮き上がらせていることなど、配色の多彩さも特徴的である。この装束に限らず、舞台上で着付けた姿になると、段組みや文様など直線的な印象のものが斜めに配置され、彩りにふくよかさを増す。それらの布石的な構図は、制作時に意図されたものであると考えられる。

個人蔵



笹色の紅

研究者代表：矢島 仁（芸術学部映像学科准教授）

「よくできた紅は、緑色に輝く」これは2016年に東京工芸大学で作った短編映画「紅」の一節だが、その作品を製作中に、「なぜ赤い紅が緑色に見えるのか」という素朴な疑問が残った。誰に聞いても納得できる答えが返ってこない、ならば調べてみようと化学の専門家の協力を仰ぎ共同研究プロジェクトを立ち上げた。

まず仮説としていた構造色説は、反射光のスペクトルに角度依存性の無いことと電子顕微鏡での観察結果から明確に否定された。次いで反射光の偏向状態の観測から、誘電体(絶縁物)の特徴よりむしろ金属に近い特徴を見い出し、緑色光の反射が色素膜のごく表面の結合電子に関わるものであるとの結論に達し、これを幾つかの論文として発表した。

ところで、江戸時代の文献を見ると「まず下地に墨を塗りその上に紅を濃く付けべし」という記述がみられる。俗説では「紅の節約のため」などと言われてきたのだが、実験してみると、どんなに厚く紅をつけても浮世絵のような色調にはならない、しかし予め唇に墨をつけた上に紅を乗せると見事なまでの金属的緑色光沢が生まれた。つまり紅の節約などではなく『墨を塗るのは必須の極意である』という結論に達したのである。

ゲーテも記述していた不思議な金属的光沢、それをその当時の日本ではすでに紅色素膜のごく表面での現象であることに気付き、墨により透過光を吸収し反射光だけを際立たせ、化粧として楽しむという文化があったことに驚かされた。

紅は緑色の550nmの光を吸収しその一部を鮮やかな赤い蛍光として放射する。蛍光が出せない条件では直ちに同じ波長で放射(反射)する。紅色素の分子は光を吸収し、また放射しながら次第に壊れる(退色)。　だから　紅は 儚く美しい、うつろひのいろ。

▶短編科学映画「笹色の紅・Grünen Metallglanz」

【上映時間】10分45秒　【完成】2021年1月
【視聴対象】一般向け

▶スタッフ
【企画・製作】矢島 仁・佐々木麻衣子・能勢 広
【研究者】佐々木麻衣子・大嶋正人・高橋圭子・平岡一幸・八代盛夫・山田勝実・矢島 仁
【外国語監修】大島 武　【字幕翻訳】イアン・マクドゥーガル
【語り】山下恵理子　【出演】遠藤百華　【音楽】芳晴

▶製作意図

この映画は、ベニバナ色素が緑色に見える現象を解明し学術発表した成果を、光と同じく電磁波である電波を例に解説を試みる。

また、550nm の緑色光を吸収し赤い蛍光を放射をする紅と、濃度消光により蛍光放射をできない色素が吸収した光を同じ波長で放射(反射)する状態とを、分かり易く二つ並べて実写で見せたい。

さらに、墨を塗る目的について、俗に流布されている「紅の節約のため」などではなく、『透過光を吸収させるための必須の極意』であることを鮮やかに証明し、グローバルに発信したい。

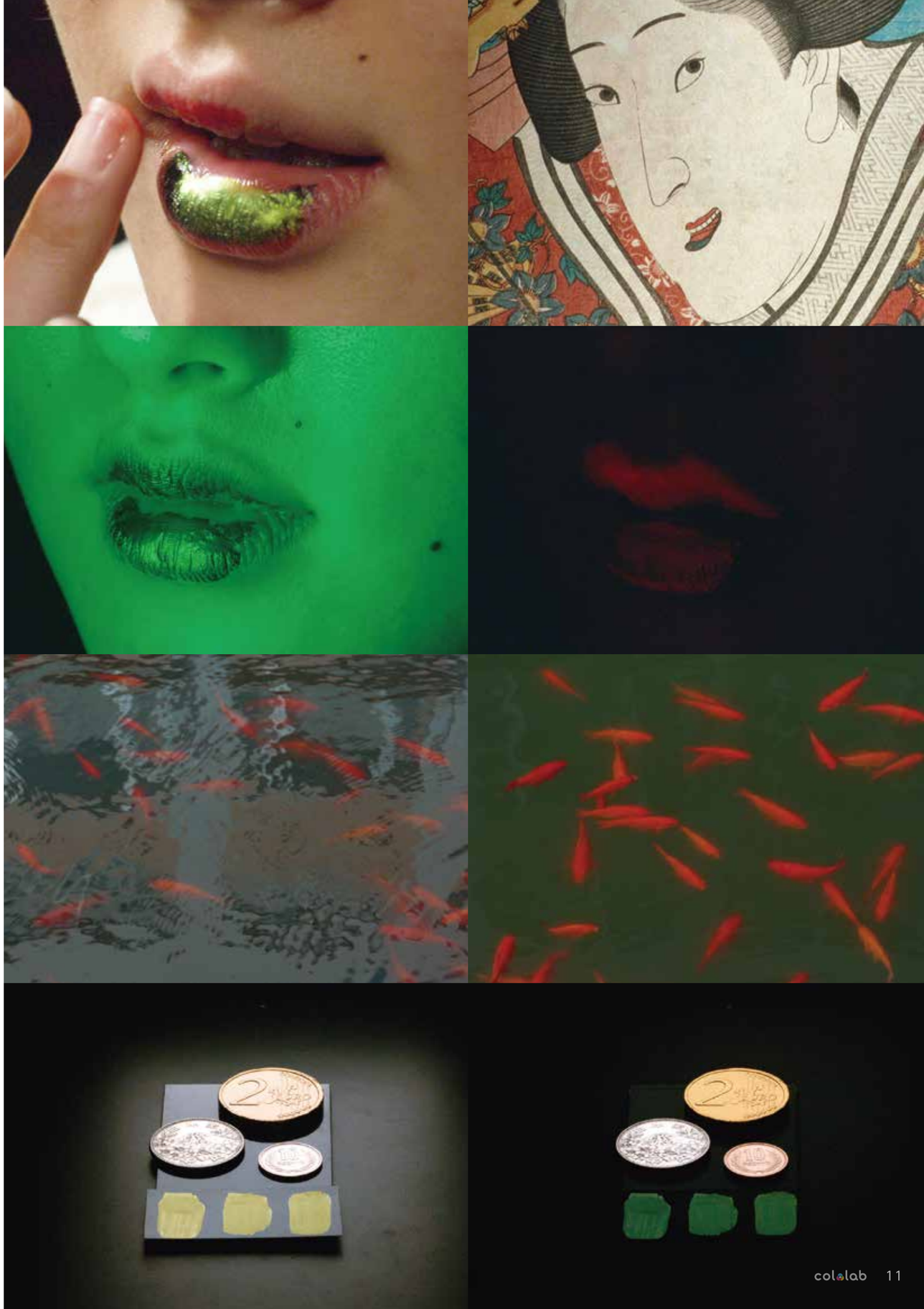
▶作品概要

江戸時代末期の日本では、唇を緑色と赤とに塗り分ける化粧が流行っていたという。なぜ、赤い紅花色素が緑色の光沢を持つのか、その謎に迫る学術研究の成果。

映画「笹色（ささいろ）の紅（べに）・Grünen（ぐりゅーねん） Metallglanz（めたるぐらんつ）」が国際映画祭で特別賞

フィンランドのヘルシンキ国際教育映画祭(Helsinki Education Film Festival International, HEFFI2021)において特別賞・最優秀芸術教育映画賞 (BEST ART EDUCATIONAL FILM)に輝きました。

この映画祭は、映画を通じて教育と学習体験を向上させることを目的として毎年の9月から10月にかけてヘルシンキの教育機関や地元企業と共同で上映する他に、ワークショップ、ディスカッション、なども行われ、映画やビデオを通じて新世代を教育することを使命とした映画祭です。



陰翳礼讃

谷崎潤一郎の美意識を表した「陰翳礼讃」は、明治期に一気に西洋文化に駆逐された日本古来の光や色の感覚、またそれらを前提にしていた建築様式や生活道具、芸能の持つ本質的な美の様式を指摘した名著である。展示パネル(右ページ)にそのいくつかの部分を抜粋した。西洋から輸入された室内照明は部屋の隅々までを照らし出すものであったが、一方で日本古来の住居はその湿潤な気候において室内を快適に保つために機能している砂壁に外光を吸収させ、光らせない。この伝統こそが一歩も譲れぬ我が国のアイデンティティであって、年月を経て淘汰してきた能や茶の湯、器(うつわ)の塗りや汁物、菓子、そして女性の美しさ、これらすべてが陰翳の中に置かれてこそ本来の魂を宿す。「陰翳礼讃」は、その一つ一つの具体例について丁寧に可視化し我々が忘れかけている本来の居場所へ回帰させてくれるように思う。

ここでは本企画展において展示している能舞台と能装束、床の間、笹色の紅に関連していると思われる箇所を紹介している。これらを読まれてから改めて展示をご覧頂いてはいかがだろうか。

(文・森山剛)

協力:芦屋市谷崎潤一郎記念館

谷崎 潤一郎 (1886-1965)

「陰翳礼讃」

厠

私は、京都や奈良の寺院へ行って、昔風の、うすぐらい、そうしてしかも掃除の行き届いた厠へ案内される毎に、つくづく日本建築の有難みを感じる。茶の間もいいにはいいけれども、日本の厠は実に精神が安まるように出来ている。それらは必ず母屋から離れて、青葉の匂や苔の匂のして来るような植え込みの蔭に設けてあり、廊下を伝わって行くのであるが、そのうすぐらい光線の中にうずくまって、ほんのり明るい障子の反射を受けながら瞑想に耽り、または窓外の庭のけしきを眺める気持は、何とも云えない。漱石先生は毎朝便通に行かれることを一つの楽しみに数えられ、それは寧ろ生理的快感であると云われたそうだが、その快感を味わう上にも、閑寂な壁と、清楚な木目に囲まれて、眼に青空や青葉の色を見ることの出来る日本の厠ほど、恰好な場所はあるまい。そうしてそれには、繰り返して云うが、或る程度の薄暗さと、徹底的に清潔であることと、蚊の呻りさえ耳につくような静かさとが、必須の条件なのである。私はそう云う厠にあって、しとしとと降る雨の音を聴くのを好む。殊に関東の厠には、床に細長い掃き出し窓がついているので、軒端や木の葉からしたたり落ちる点滴が、石燈籠の根を洗い飛び石の苔を湿おしつゝ土に沁み入るしめやかな音を、ひとしお身に近く聴くことが出来る。まことに厠は虫の音によく、鳥の声によく、月夜にもまたふさわしく、四季おりおりの物のあわれを味わうのに最も適した場所であって、恐らく古来の俳人は此処から無数の題材を得ているであろう。されば日本の建築の中で、一番風流に出来ているのは厠であるとも云えなくはない。

茶の間

もし日本座敷を一つの墨絵に喩えるなら、障子は墨色の最も淡い部分であり、床の間は最も濃い部分である。私は、数寄を凝らした日本座敷の床の間を見る毎に、いかに日本人が陰翳の秘密を理解し、光りと蔭との使い分けに巧妙であるかに感嘆する。なぜなら、そこにはこれと云う特別なしつらえがあるのではない。要するにただ清楚な木材と清楚な壁とを以て一つの凹んだ空間を仕切り、そこへ引き入れられた光線が凹みの此処彼処へ朦朧たる隈を生むようにする。にも拘らず、われらは落懸のうしろや、花活の周囲や、違い棚の下などを填めている闇を眺めて、それが何でもない蔭であることを知りながらも、そこの空気だけがシーンと沈み切っているような、永劫不変の閑寂がその暗がりを領しているような感銘を受ける。思うに西洋人の云う「東洋の神秘」とは、かくの如き暗がりが持つ無気味な静かさを指すのであろう。われらといえども少年の頃は、日の目の届かぬ茶の間や書院の床の間の奥を視つめると、云い知れぬ怖れと寒けを覚えたものである。しかもその神秘の鍵は何処にあるのか。種明かしをすれば、畢竟それは陰翳の魔法であって、もし隅々に作られている蔭を追い除けてしまったら、忽焉としてその床の間はただの空白に帰するのである。われらの祖先の天才は、虚無の空間を任意に遮蔽して自ら生ずる陰翳の世界に、いかなる壁画や装飾にも優る幽玄味を持たせたのである。

能

それから、これは私一人だけの感じであるかも知れないが、およそ日本人の皮膚に能衣裳ほど映りのいゝものはないと思う。云うまでもなくあの衣裳には随分絢爛なものが多く、金銀が豊富に使ってあり、しかもそれを着て出る能役者は、歌舞伎俳優のようにお白粉を塗ってはいないのであるが、日本人特有の赧みがかった褐色の肌、或は黄色味をふくんだ象牙色の地顔があんなに魅力を発揮する時はないのであって、私はいつも能を見に行く度毎に感心する。金銀の織り出しや刺繍のある袿の類もよく似合うが、濃い緑色や柿色の素襖、水干、狩衣の類、白無地の小袖、大口等も実によく似合う。たまたまそれが美少年の能役者だと、肌理のこまかい、若々しい照りを持った頬の色つやなどがそのためにひとしお引き立てられて、女の肌とは自ら違った蠱惑を含んでいるように見え、なるほど昔の大名が寵童の容色に溺れたと云うのは此処のことだなど、合点が行く。歌舞伎の方でも時代物や所作事の衣裳の華美なことは能楽のそれに劣らないし、性的魅力の点にかけてはこの方が遙かに能楽以上とされているけれども、両方をたびたび見馴れて来ると、事実はそれの反対であることに気が付くであろう。

女性

「掻き寄せて結べば崇の庵なり解くればもとの野原なりけり」と云う古歌があるが、われわれの思索のしかたはとかくそう云う風であって、美は物体にあるのではなく、物体と物体との作り出す陰翳のあや、明暗にあると考える。夜光の珠も暗中に置けば光彩を放つが、白日の下に曝せば宝石の魅力を失う如く、陰翳の作用を離れて美はないと思う。つまりわれわれの祖先は、女と云うものを蒔絵や螺鈿の器と同じく、闇とは切っても切れないものとして、出来るだけ全体を蔭へ沈めてしまうようにし、長い袂や長い裳裾で手足を隈の中に包み、或る一箇所、首だけを際立たせるようにしたのである。

紅

われわれの先祖は、明るい大地の上下四方を仕切ってまず陰翳の世界を作り、その闇の奥に女人を籠らせて、それをこの世で一番色の白い人間と思い込んでいたのであろう。肌の白さが最高の女性美に缺くべからざる条件であるなら、われわれとしてはそうするより仕方がないのだし、それで差支えない訳である。(中略)私はさっき鉄漿のことを書いたが、昔の女が眉毛を剃り落したのも、やはり顔を際立たせる手段ではなかったのか。そして私が何よりも感心するのは、あの玉虫色に光る青い口紅である。もう今日では祇園の藝妓などでさえ殆どあれを使わなくなったが、あの紅こそほのぐらい蝋燭のはためきを想像しなければ、その魅力を解し得ない。古人は女の紅い唇をわざと青黒く塗りつぶして、それに螺鈿を鏤めたのだ。豊艶な顔から一切の血の気を奪ったのだ。私は、蘭燈のゆらめく蔭で若い女があの鬼火のような青い唇の間からときどき黒漆色の歯を光らせてほゝ笑んでいるさまを思うと、それ以上の白い顔を考えることが出来ない。

床の間

三浦 大徹（武者小路千家）、田野倉 徹也（数寄屋建築家）

古来、部屋の壁面に特別なしつらえをして「床（とこ）」と呼んでいる。招きもてなす側の亭主が自身の心の中へ客人を迎え入れるが如く、床へ客人を通しもてなす。もてなしの気持ちを形にする中で、非日常である床の間に季節や時間帯にしたがって変化する自然の光を迎え入れる工夫がなされてきた。側面に配置した障子の障子紙から柔らかく透過する外光は、陰翳に沈む床の奥壁へ当たり、季節の花や軸をかすかに照らし出す。そんな床へと導かれた客人は、さらに陰翳に沈む釜からゆっくりと立ち昇る湯気が注がれ香り立つ茶を、両の掌（たなごころ）で受け止める茶碗の暗く奥ゆかしい陰翳の底からいただく。

本展示では、能舞台の檜（ひのき）材に呼応して杉の香りのする床の間で、時間と共に変化する日光が下地窓（墨跡窓）越しに柔らかに花を照らす様子を体験する。

（文・森山剛）

和の色の広がり

森山 剛（工学部工学科准教授）

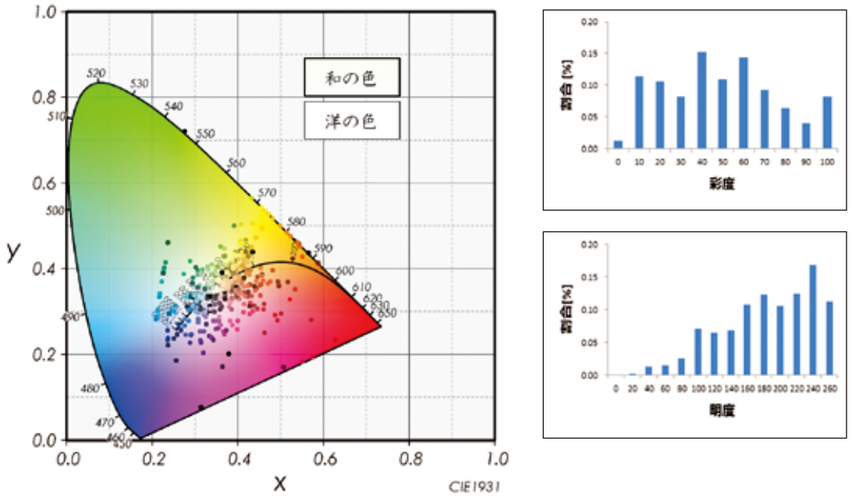
古来日本には赤（明るい）、黒（暗い）、白（我々の存在を超えるもの）、そして青（色相を持つ色彩のすべて）の四色があったと言われる。それは、青春朱夏白秋玄冬で知られる中国の陰陽五行思想に由来し、方角や季節といった人間生活と色とを結びつけてきた。すなわちこれらの色は、我々を取り巻く自然と我々との接点を表現したものであるとも言えないだろうか。このように、日本の伝統的な色彩感覚は、水彩絵の具のパレットを広げたような色とりどりの色相（色の種類）を区別したいという動機ではなく、万物をいくつかの観念的な象徴にカテゴライズしたいという動機に発しているように思われる。そして、その基軸が明暗（陰翳）であった。

日本古代の色彩名を分類すると以下の五つに分類されるという[1]。

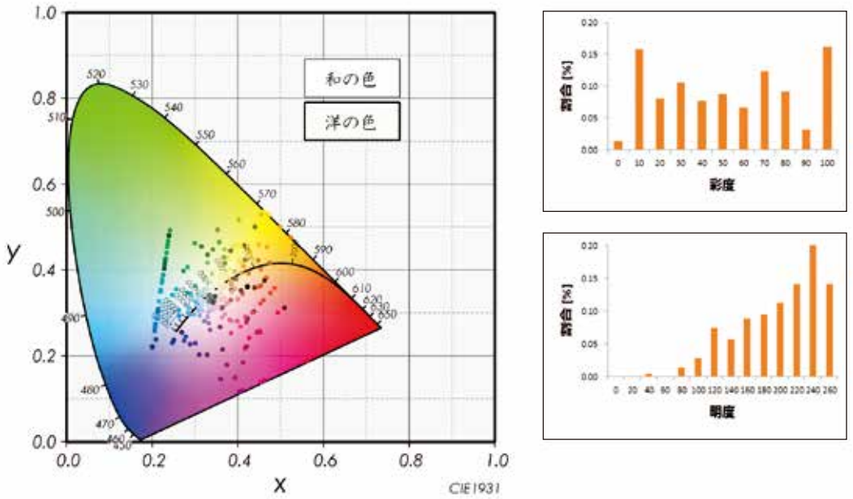
第一類	色相そのままを表現したもの 例：紫（むらさき）
第二類	主観的色彩表現によるもの
	①主観的色相、または、観念的色彩を示したもの 例：日本独自の古代色彩名「あか」「くろ」「あお」
	②抽象的表示のためのもの（現実の色相とは無関係） 例：黄色い声の「黄」
第三類	染材・染法を示したもの（色相を示すものではない） 例：蘇芳（すおう）色や支子（くちなし）色
第四類	自然現象や、風物の名称をそのまま色彩名としたもの 例：山吹色
第五類	中国的観念によるもの、または、漢字のもつ中国的意義そのままで色彩名としているもの 例：青、白、赤、黄、玄

本展示では、和色とされている色[2]の色相や彩度、明度が全色空間の中でどのような広がりをもつのかを体験する。「和の色」ボタンと「洋の色」ボタンを順にタッチしてそれらの彩度と明度の分布を比較すると「和の色」の方が中間的な彩度が多く明度も暗めなことがわかる。
（文・森山剛）

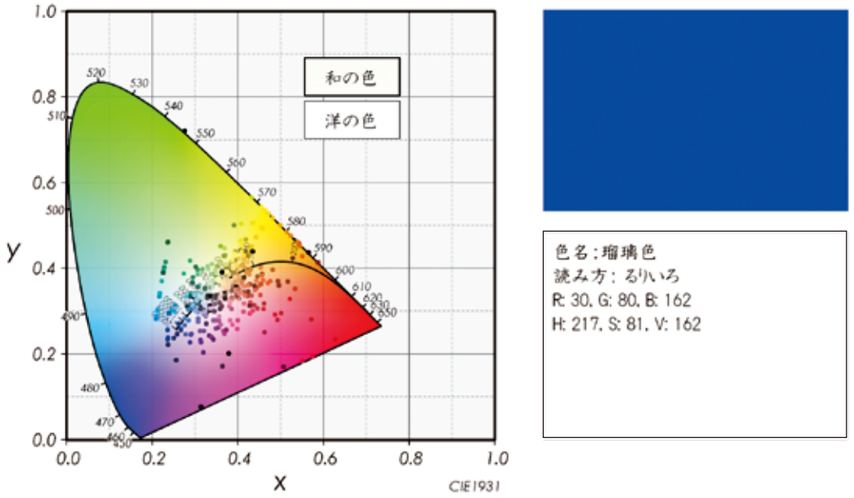
参考文献
[1] 前田雨城, 色一染と色彩, 法政大学出版局, 1980
[2] 和色大辞典, https://www.colordic.org/w, 1997



「和の色」ボタンにタッチすると左のxy色度図に和の色がドットで表示され、右に彩度と明度の分布が表示される。



「洋の色」ボタンにタッチすると左のxy色度図に洋の色がドットで表示され、右に彩度と明度の分布が表示される。



左のxy色度図の中のドットにタッチすると、右にその色の色名、RGB値及びHSV値が表示される。

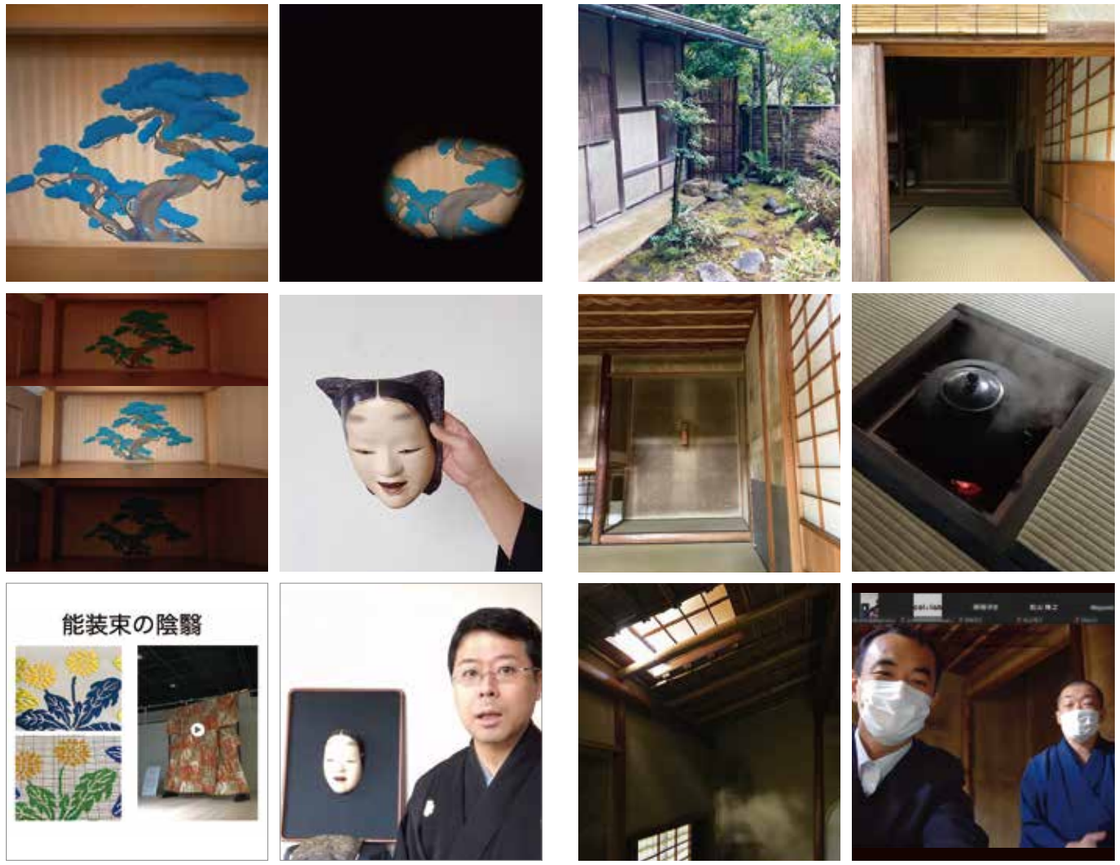
記念ワークショップ
「文化の萃点（すいてん）～能楽と茶の湯の陰翳（いんえい）」

本企画展は、日本古来の美意識の根本にある陰翳（いんえい）について、伝統文化を紐解きながら考えるという内容ですから、来場者は、どちらかというと内面世界に静かに沈み込む傾向が強くなり、もしかすると発信したいメッセージまでもが陰翳に沈み不明瞭になるのではないかと危惧しました。そこで、体験を特徴とするワークショップを開催し、企画展のメッセージを言葉にして語り合う場所を作ろうと考えました。

本ワークショップでは、能楽と茶の湯という一見別々に見える伝統文化が、実はいずれも一日のうちに刻々と変化する自然光とその陰翳を様式美に昇華させてきたことを紹介しました。まず松山隆之氏から、能面の陰翳の変化が造り出す表情や能面の視野のデモンストレーション、陽光の変化と共に見えの変化する能装束のタイムラプス動画の紹介がありました。次に、三浦大徹氏に、露地を通り躙（にじ）り口から茶室へ入って目にする床の間の陰翳、そして下地窓外のすだれの有無や突上窓の開閉による茶室陰翳の変化によって場が切り替わる様子を作って頂き、司会者がカメラを持って進んでいく映像をオンライン配信することで参加者に仮想体験して頂きました。最後に、陰翳は能楽と茶の湯といった文化の萃点（すいてん）であるだけでなく、それが人の内面を作り、その内面によって外界の見え方が決まることを考えれば、実は万物の萃点であると結論しました。陰翳とは自分自身であり、自分を取り巻く世界である、陰翳を認め陰翳を受け入れる、こうした日本の伝統文化が教える本来の在り方に視座を移すと、何でも白日の下にさらそうとして疲弊した現代社会の有様に気づくと共に、違いを許容し互いに支え合う理想の社会像がおのずと見えてくるようです。

（文・森山剛）

日時：2022年2月19日（土）　10:30～12:00
講師：松山 隆之（能楽シテ方観世流）、三浦 大徹（武者小路千家）
司会：森山 剛（本企画展ディレクター）
会場：オンライン



カラボギャラリー第8回企画展

陰翳の中の色彩美

―日本の伝統―

会期：2021年12月17日（金）～2022年3月25日（金）
会場：東京工芸大学厚木キャンパス12号館2階カラボギャラリー
公式サイト：https://collab.t-kougei.ac.jp/gallery/
主催：東京工芸大学
運営：色の国際科学芸術研究センター

展覧会ディレクション：森山剛
協力：公益財団法人手織技術振興財団、渡文株式会社
　　国際交流基金（JF）、芦屋市谷崎潤一郎記念館
　　株式会社アヴニールマックス、HIGURE 17-15 cas

パンフレット監修：森山剛
ポスター・パンフレットデザイン：川村貞知・長岡真子

発行者：東京工芸大学（代表）
〒243-0297 神奈川県厚木市飯山1583　TEL：046-242-4111
発行日：2022年3月